

中国空軍が 6+1 種類の作戦能力を強化

漢和防務評論 20160203 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

最近、中国空軍は、重要会議を開催し、習近平の意図に基づく戦略空軍概念の軍内への確立を図ったようです。重点は、戦略爆撃機部隊の発展と米国の戦略 ICBM への対抗手段の確立にあるようです。偵察監視の範囲は西太平洋地区をカバーし、第 2 列島線まで含むとのことで、日本周辺の空域も含まれることとなります。記事中の 6+1 の 1 とは、北朝鮮のミサイルを指すのかも知れません。

KDR 東京特電：

KDR は、最近中国空軍が極めて重要な会議を開催したことを少し前に報道した。中国の戦略消息筋は、KDR に対しこの会議の重要性を伝えた。この会議のねらいは、習主席が認定した空軍の”戦略的重要性”を明確に認知させることにあった。この会議において、中国軍内に戦略空軍の概念を確立することが提議された。それは、戦略爆撃機部隊及び対戦略弾道ミサイル戦力（米国 ICBM に対する迎撃）の建設を骨子としている。

戦略偵察方面では、その範囲は西太平洋地区をカバーし、第 2 列島線に達している。中国海軍の外洋進出戦略に続き、中国空軍もまた前方進出戦略を採用することになった。中国空軍の対空警戒監視及び航空攻撃並びに作戦指揮の及ぶ地理的空間的範囲は、中国本土全域、及び第二列島線内の主要海域並びに陸上は国境線から前方 400 乃至 500 km 前後延伸した主要地区が含まれる。

戦略消息筋は次のように述べた：会議では、装備開発に関する 6+1 の概念を確定した。6+1 の意味は、第一列島線を最大進出範囲とし、第 4 世代機、無人機、低空・低速・小型航空機、弾道ミサイル、宇宙空間に接近できる飛翔体、及び低軌道宇宙機器を攻撃目標として、低・中・高強度兵器を結合した”6+1”の宇宙航空攻撃能力を組み合わせることである。”6”の中身は、新時代の制空作戦能力、中・低高度地上防空作戦能力、ターミナル段階弾道ミサイル迎撃能力、ミッドコース段階迎撃能力、弾道ミサイル空中発射迎撃能力、及び新概念防空作戦能力を指す。”1”は、区域航空宇宙作戦能力を指す。

会議では、米国の ICBM 攻撃に対抗する手段の建設方針、すなわち 3 種類の対弾道ミサイル戦力の建設方針を確定した。特に強調したのは空中からの対弾道ミサイル戦力である。戦力構造の中で、航空戦役進攻、戦役防空防宇宙、航空宇宙戦略反

撃を 3 大核心能力に位置付けた。

会議では、2030 年までに航空宇宙から中国に脅威を及ぼす国家を具体的国名を挙げて討議した。それは、米国、台湾、日本、インド、ベトナムである。

米国に就いては、会議文献で次のように総括した：米国は、伝統的な航空宇宙大国である。戦力配備において、海外航空戦力の 70%、空母の 60%をアジアに配備すると宣言している。2010 年には”空海一体戦”構想を提議し、中国を主敵として空海一体聯合作戦準備を全面展開している、と。

台湾については会議文献で：台湾当局は、航空戦力を、武を以て統一を拒否、或いは、武を以て独立を護る基幹戦力にしている、と。

日本に就いては：日本は、航空戦力を、我が海洋権益を侵略し、中国軍が展開する地区に対する戦略的な賭博の手段としている、と。

インドに就いては：インドは、第 3 世代戦闘機を改修し、欧州から先進型戦闘機を導入しようとしている、と。

ベトナムに就いては、ベトナム等、南シナ海の対中不満国は、航空戦力を海洋争議解決の重要手段として、主力戦闘機を第 3 世代化し、第 4 世代戦闘機の導入を図っている、と。

長距離戦略爆撃機について：会議では、長距離爆撃機の数を増やすこと、空中給油機部隊の規模を拡大すること、及び AC&W機の開発速度を速めることを決定した。

また会議では、新型空中給油機、早期警戒管制機、及びその他の特殊作戦機の開発を決定した。また空中発射ミサイル、巡航ミサイル、空対地精密誘導爆弾等、長距離精密攻撃兵器の開発を大々的に促進することを決定した。

以上